

校長室だより

令和3年度

3月
修了号

令和4年3月24日(木)
志免町立志免東小学校
校長 宮邊 淳一

卒業・修了、おめでとうございます

全校で作った「ふせんアート」。1人1枚。6年生への思いをメッセージにして伝えました。



3月17日(木)に、多くのみなさまに見守られ、99名の6年生が卒業しました。卒業証書を受け取る6年生の姿は大変立派でした。コロナ禍における3度目の卒業。今までのように集会という形では、6年生への思いを届けることができなかったのですが、今年度は「ふせんアート」という形で、1~5年生が、6年生にメッセージを届けました(上写真)。下に掲載しているのは、卒業式での式辞(一部)です。

(略)

こうしたみなさんの姿を見ると、私がこれまで出会った、ある一人の女の子を思い出します。これから、その女の子の話をします。

今から27年前のことです。1995年(平成7年)1月17日に、阪神淡路大震災がおきました。死者:6434名。負傷者:43792名。自然災害とはいえ、大きな被害をもたらしたこの震災は、身体的な傷はもちろん、多くの人々の心に深い悲しみを残しました。

「さようなら」いつもと同じように下校し、いつもと同じように登校できると思っていた朝なのに。前の日、一緒に机を並べて学習していた友だちが命を失った。放課後一緒に遊んでいた先生と子どもが、再び顔を合わせる日は二度と来ませんでした。

前日の放課後、クラスの子とサッカーをしていた私には、続々と入ってくるニュースが、人ごとのように感じられませんでした。

震災からまだ1週間も経たないときのこと。クラスに、転校生がやってきました。震災の神戸から。そのとき、まさにニュースが流れていたその場所からやってきた女の子でした。生活の術(すべ)を失い、両親は神戸に残り、弟と二人だけで親戚を頼っての一時的転校でした。卒業までの約40日。彼女とは、卒業記念のオルゴールを作り、メッセージを書き合い、みんなと同じように生活しました。口数が少ないけれども、笑顔の素敵な女の子でした。しかし、彼女の笑顔の裏側には、倒壊した自宅。失った友人。そんな深い悲しみが刻まれていました。ときどき遠くを見つめる彼女の目には、一体何が映っていたのでしょうか。心を近づけたつもりではありますが、全く同じ思いをすることはできなかったと思います。

そんな彼女も、1月22日で39歳を迎えました。家の場所が変わり、音信不通になって、何年も経ちますが、卒業式が終わり、神戸に戻って行く際の彼女の言葉が今でも耳に残っています。

「私のふるさととは神戸です。大変だけど、復興に向けてがんばっている人と一緒に私もがんばります。亡くなった友だちの分まで。」(間)

力強い言葉を残した彼女のことを、この時期、よく思い出します。

ふるさとを大切に作る心。これは、みなさん一人一人の中にあることでしょう。その心の膨らませ方、具現化の仕方は様々だと思いますが、小学校で学んできたふるさと、これから学ぶ、ふるさとを大切に、基盤にしなが、自分の夢の実現に向けて歩み続けてほしいと、心から願っています。



(略)

最後に、卒業生の皆さんの人生に幸多からんことを祈念いたしまして、校長式辞といたします。

本日、全児童に修了証を渡しています。1年間、一人一人の子どもたちががんばってきた証です。子どもたちにとっては、卒業証書と同じくらい重みのあるものだと考えています。今日は、お子様の1年間のがんばりに耳を傾け、努力してきたことをしっかりとほめてあげてください。

子どもたちにとって、充実した、素敵な春休みになることを祈っています。そして、新学期に子どもたちに再会できることを楽しみにしています。今年度もたくさんの制約がある中での学校生活でしたが、保護者の皆様のご支援・ご協力で、本日を迎えられることに、心より感謝申し上げます。本当にどうもありがとうございました。